

● 中 部

水 野 みか子

「あいちトリエンナーレ2016虹のキャラヴァンサライ」の枠組みの中で開催された音楽系舞台芸術の中では、勅使河原三郎演出、ガエタノ・デスピノーサ指揮によるオペラ《魔笛》(9/17,19)の話題が大きかったが、現代音楽やコンテンポラリー・ダンスの舞台には一層のオリジナリティがあった。トリエンナーレ舞台芸術公募プログラムでは、音楽クラコ座第六回公演「アメリカ音楽電氣的歴史旅行」(9/30)、今井智景「シネクドキズムⅡ」(9/25)などが目立ち、二夜に渡った小杉武久「MUSIC EXPANDED #1/#2」では、60年代の《Anima 2》や《Mano-Dharma》から近作までを集めて和泉希洋志、浜崎健、Guity Cと共演、熱気あふれる空間で圧倒した(10/22-23)。フィリップ・ドゥクフレのウィットに富んだ《CONTACT》(10/15-16)やイスラエル・ガルバン(10/7-16)、ヴェルテダンス(10/4-5)も人気を呼んだが、愛知県芸術劇場オリジナル企画の「パフォーミングアーツ・セレクション」(10/16,18,19)や青木涼子《秘密の閨》(10/23)も注目された。

愛知芸大創立50周年記念として、オペラ(9/25)、オーケストラ(7/9)、国際シンポジウム(9/23-24)、電子音響音楽(9/11)等、種々企画が学内・学外で開催され、大学関係者・卒業生の実力と実績を広くアピールする機会となった。

オペレッタ《白馬の騎士》(名古屋市文化振興事業団企画公演、2/17-20)は、指揮井村誠貴、演出池山奈都子で上演され、楠木勇樹や奥山育子ら実力ある歌手陣が出演した。千住明のオペラ《万葉集》(3/26)ではソプラノの飯田みち代、テナーの神田豊壽、バリトンの吉田裕貴らが活躍。名古屋オペラ協会は、指揮倉知竜也、演出池山奈都子で林光の《森は生きている》(4/16-17)を上演。「ニーベルングの指輪」四部作上演に踏み出した愛知祝祭管弦楽団は、フリッカに相可佐代子、ファーフナーに松下雅人、ファーフゾルトに長谷川顕、フライアに金原聡子、ドンナーに滝沢博、ヴォークリンデに大須賀園枝といった地元実力派を配して《ラインの黄金》をコンサートホールで上演(9/11)。東海バロックプロジェクトオペラ制作委員会はトリエンナーレ共催で、演出池山奈都子、音楽アドヴァイザー宇田川貞夫の《ポッペアの戴冠》を上演した(9/24)。

愛知県芸術劇場で行われたニフエール第12回公演では、アコーディオンの太田智美とリコーダーの鈴木俊哉が出演し、ニフエールの代表者伊藤美由紀の新作や石井真木、グバイドゥーリナ、ソラージュらの作品を演奏(6/19)。

オルガンでは、近藤岳や勝山雅世が種々角度での普及に尽力し、エドガー・クラブが21年ぶりに愛知県芸術劇場に再来(10/20)、近年一層活発な活動を展開する吉田文が、トリエンナーレの舞台芸術公募プログラムの一環でメシアン、ケージ、トマス・マイヤー＝フィービッチやグレゴリオ聖歌、バッハなどを縦横無尽に組み上げて舞踊や朗読とのコラボを実現した(9/24)。

名古屋フィルハーモニー交響楽団は、外山雄三指揮のニューイヤースペシャル(1/8)、1月定期(1/15-16)での尾高忠明のブルックナー第9番、2月定期(2/19-20)でのロリー・マクドナルド指揮によるドヴォルザークの第8番等で力演を続

け、3月はマーティン・ブラビンスの常任最後の定期(3/11-12)となった。4月定期(4/15-16)は小泉和裕音楽監督就任披露公演。小泉の指揮は、11月定期でのゲルハルト・オビッツとのブラームスのピアノ協奏曲第一番も印象深い。7月定期(7/22-23)には名誉客演指揮のティエリー・フィッシャーが登場、10月定期(10/21-22)ではアントニ・ヴィット指揮でミハイル・ブレトニョフがソリストとして起用され、この回にはレジデント・コンポーザー藤倉大の《レア・グラビティ》も演奏された。12月定期でのモーシェ・アツモンによるブラームスの第2番は、アツモン現役引退にふさわしい堂々たる演奏だった。小泉指揮でのパースデーコンサート(7/9-10)は短めの管弦楽曲を並べ、心温まる二日間となった。

セントラル愛知交響楽団はレオシュ・スワロフスキー、小松長生、曾我大介、角田鋼亮ら指揮者による定期演奏会を進める一方で、愛知県内の芸術系・音楽系大学・学部との協力関係のもと、ガラコンサートや第九、子ども巡回劇場など幅広い活動を展開。中部フィルハーモニー交響楽団は秋山和慶、下野竜也、堀俊輔とともに、小牧、名古屋、松坂、犬山でそれぞれ定期演奏会を開催。愛知室内オーケストラは第17回定期演奏会(10/1)を開催し、常任指揮者新田ユリとの北欧プログラムで存在感を増している。オーケストラ・アンサンブル金沢はアシュケナージ指揮、ジャン＝エフラム・バヴゼのソロによって名古屋定期を行った(9/16)。

ソプラノでは、若手の高木彩也子(2/21,26)や盛かおる(11/5)、朝岡真木子の新作オペラ「白鷺幻想」を初演した伊藤晶子(6/18)、日本のうたを歌い込む池田京子(7/18)、バッハ、グリーグ、ヴィラ・ロボス、ヴェネチア演奏記念の水野みか子《水都孤遊》などを歌った荻野砂和子(10/22)、信時潔と山田耕作に集中した佐地多美(11/11)、ヤナーチェクを集中的にとりあげた小林史子(11/16)らが印象的。バリトンでは、ヴェテラン奥村晃平(11/28)の「詩人の恋」が目立った。

ピアノでは、鈴木真貴子(2/7)、山内敦子(2/11)、宮田俊雄(5/8)、石川馨栄子(5/21)、桑野郁子(5/28)、広瀬和子(9/30)、戸崎由香(10/7)、北村朋幹(10/23)、渡辺理恵子(11/6)、戸谷誠子(11/15)、大岡訓子(12/15)らがリサイタルを開催。弦楽器では、ヴァイオリンの島田真千子(1/24)、森典子(2/29)、平山晶子(4/3)、石田なをみ(10/16)、森本千絵(12/20)、リュートの藤間勘幸(10/8)、ギターの酒井康雄(10/9)、そしてザ・ストリングス名古屋(5/16)、また、フラウト・トラヴェルソの片岡博明、サクソフォンの渡辺志穂(11/13)、打楽器の堀部秀美(1/23)、泉亜希(3/3)、窪田健志(11/14)らも注目された。古今の楽曲に幅広く計画的に取組むアンサンブル・ソノリタス(3/2)、トリオ・ミンストレル(9/11)、MiA(12/23)や、ブラームス室内楽作品全曲に取り組む室内楽集団アンディアーモも興味深かった。過去の名古屋音楽ベンクラブ賞受賞者による「音環V」には作曲のくりもとようこ、ギターの谷辺昌央、メゾソプラノの寛聰子が出演。

静岡音楽館AOIでは、「間宮芳生の声Ⅱ白い風、夜の歌」(1/30)、室内楽フェスティバルの一環で、小山実稚恵、矢部達哉、宮田大によるトリオのコンサート(10/8)などが開催されたほか、レジデンス・クワルテット(11/12)、オルガン(石丸由佳)とトランペット(菊本和昭)の響宴などが開催された。豊田市コンサートホールでは、ラデク・パボラーク指揮の紀尾井シンフォニエッタ東京(7/2)やスアール・アゲンによるバリ島民族音楽のコンサート(9/25)、藤原歌劇団の《ラ・ボエーム》(11/5)などが注目された。